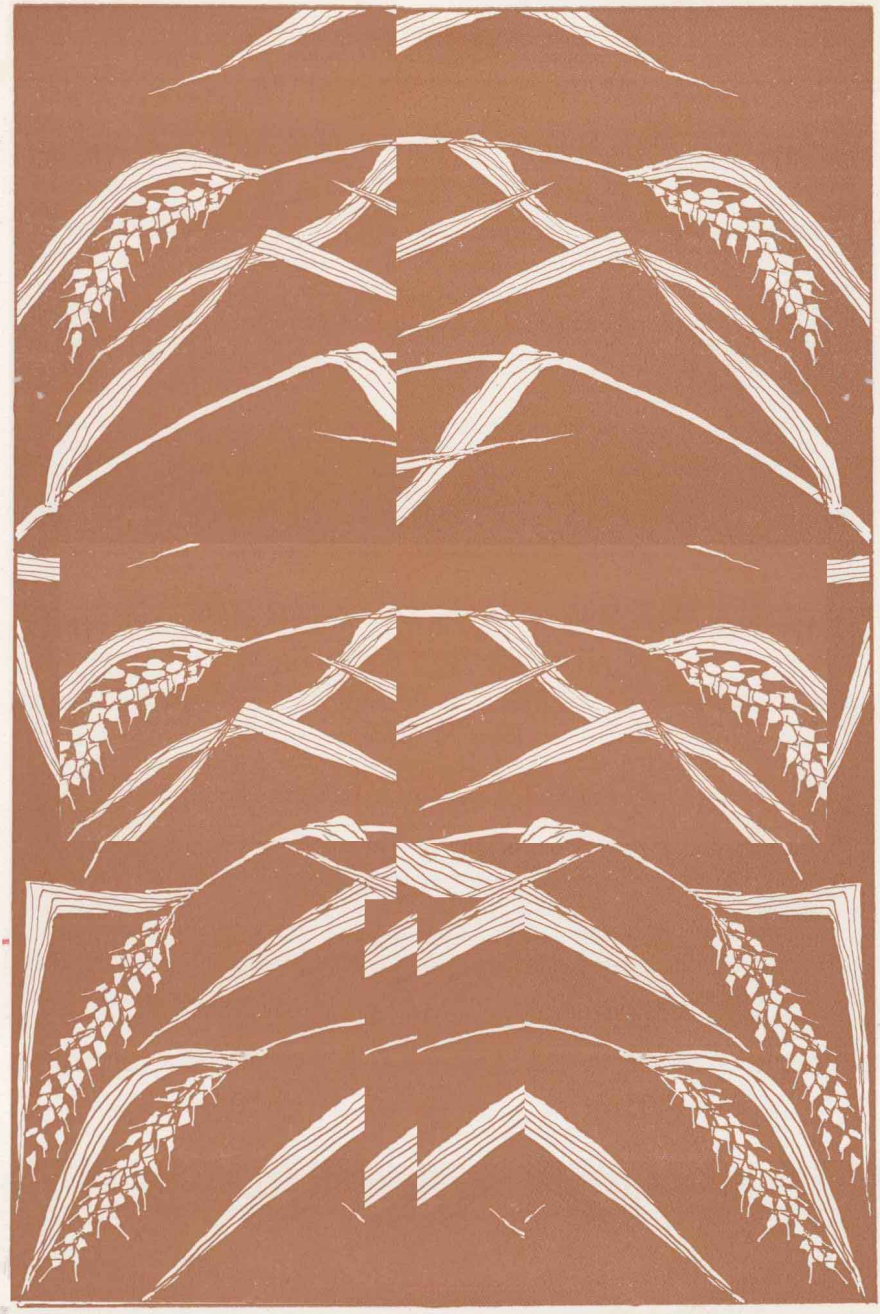
笛鬼

滋野透子＝作

三谷靱彦＝絵

鬼

滋野透子＝作
三谷靱彦＝絵



理論社

作者　滋野透子（しげの・すみこ）　　NDC913　A5変型　20cm　254p

画家　三谷靱彦（みたに・ゆきひこ）　　1983年初版　8393—31531—8924

笛　鬼　1983年2月第一刷発行©

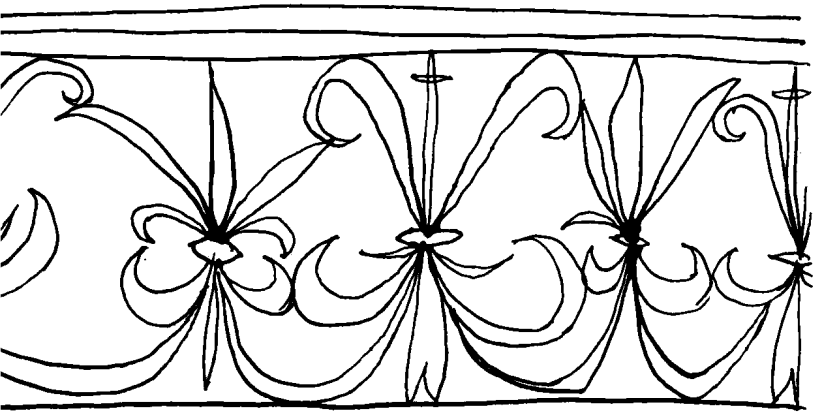
制作　小宮山量平　　発行　山村光司　　発行所　株式会社　**理論社**

住所　東京都新宿区若松町15-6　　電話03（203）5791　　振替口座　東京9-95736

笛鬼（ふえおに）

目次

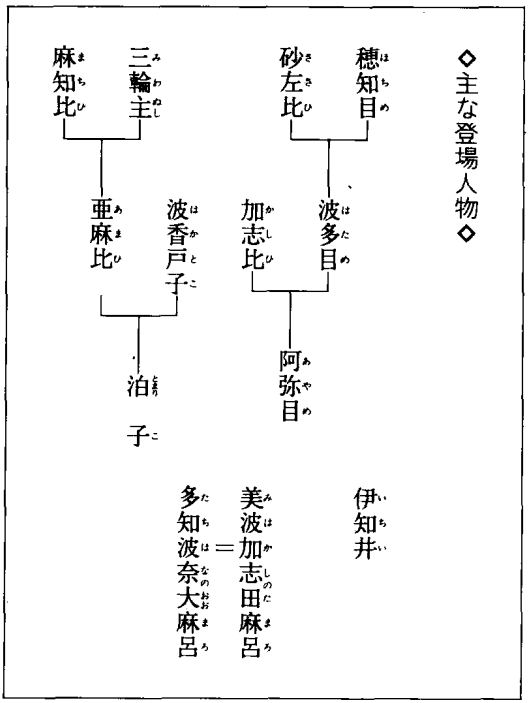
1 その前夜……5
2 口無しの泊子……19
3 しこのみたて……31
4 逆賊の巣……48
5 ほけじいの笛……58
6 悲しい女たち……83
7 笛のあとつぎ……99
8 雪姫の誘い……111
9 火の道から戻って……130
10 新しい音の世界……146

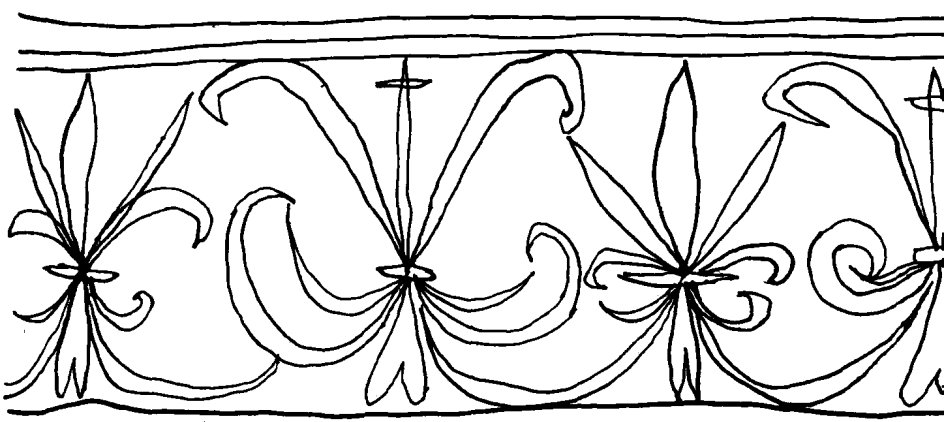


此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

11 おごりの行方……159
12 加志比の嘆き……177
13 旅の笛吹き……198
14 二つの道……220

◇主な登場人物◇





そうてい・さしえ

三谷 靭彦

1　その前夜

1

「暑いのう」

「……」

ほんの一足前にはいつくばっている父の波多目は、聞こえたのか聞こえないのか、無言のまませわしなく手を動かし動かし、にじり進んで行くばかりである。

「父者！　父者は暑うないのか？」

阿弥目は、いらいらと父のしりに向かって呼びかけてみる。が、いつもの、

「暑いのう。向こうのあぜに着いたら、一浴びしてくるとしようかの……」

という答えはかえってこない。

――ふっ、きょうの父者の不きげんなこと。――

しようがないので、阿弥目は母にナゾをかけてみる。

「暑いのう、母者！　のどはかわかぬか？」

父と並んではいつくばっていた母の加志比は、泥田から顔をあげてふりかえる。

「いくたび『暑い、暑い』をくり返しても、涼しゅうはならぬぞえ」

静かな声だ。暑さをさけるためにかぶった白い麻布の下で、大きな黒い目がいとおしそうに阿弥目を見つめている。

――ちえっ！――

と、心の中で舌打ちし、阿弥目は腰をのばした。ぎらぎらと照りつける太陽に向かって、思いきりからだをのけぞらせる。

「あ、ちちち……」

曲げ通しだった腰が焼けつくように痛む。

「母者！　わしは腰が痛いわ」

「でもあろうがのう……。そなた、もう、十歳であろ。こらえねばなりませぬぞ」

――ふっ、十歳はつまらぬのう！　十歳になってからというもの、こらえねばならぬことばかりじゃ！――

阿弥目は、はいつくばってしまった母の背に目をむき、下くちびるをつき出した。

ピィー！

かん高いアシ笛の音。と、急にたくさんのアシ笛が、入り乱れてはしゃぎ始めた。

「ふん！　下手くそめらが！」

阿弥目の目の裏に里境の川が映る。川の中をすっぱだかで暴れまわっている里の子らが映る。岸辺の水の中につかり、アシの葉をつぎつぎとむだにして作った笛の音を、たしかめ合い競い合っている者たちの姿が映る。

もう、いても立ってもいられない。

「母者！　のう！　のう！　母者！」

泥田の中で地団太をふみ、阿弥目は母の背に向かってせがむ。が、きょうの母の背にはとりつく島がない。

――ちえ！　きゃつらは、涼しかろうのう。――

阿弥目は半べそをかいてはいつくばる。らんぼうに田の中をひっかきまわし、底の方から雑草を根こそぎ引きずり出しては、まとめて泥の中へ埋めこんでいく。

――くそ！　うぬらのせいで、わしは暑うて、腰が痛うて……かなわぬわ！――

阿弥目は、この田一面の雑草がにくくてたまらない。ことにヒエはいまいましい草だ。ヒエは、穂の出るその寸前まで、『イネでございます』というような顔をし、イネの株と並んで人の目をあざむいている。

まだ五、六歳だったころの阿弥目は、いくら教えられても、イネとヒエとの区別がつかず、取り残しては、父や母から、

「ほら、ヒエ殿が、『阿弥目さま恩に着まする』と、頭を下げて礼をいっておるわ」

などと笑われたものであった。が、十歳になった今は、もう、ヒエに礼などいわれることはない。イネの株にぴったり身をよせているヒエを一目で見ぬき、

「くそ！　ずうずうしいやつめ！」

と、まるであだ打ちでもするように引っこぬく。うっとうしいじゃまものがなくなると、イネはいかにも涼しげにそよぐ。阿弥目の胸もすがすがしさでいっぱいになる。

しかし、日がな一日焼けつくような真夏の太陽を背負い、湯のような泥水の中をはいつくばり通せるほど、阿弥目はまだ大人になっていなかった。

父と母とは、イネのうねを四本受け持って進んで行く。つまり、まん中のうね間をはいながら、左右二本ずつのうねに手をのばして草を取り進むのである。だが、まだ手の短い阿弥目は、半分の二うねを受け持たされているだけである。それも、父と母との間にはさまれているので、両方から少しずつ手をのばして手つだってくれる。だから、実際は一うね半ほどの草取りなのに、腰をのばしたり、ゲンゴロウやミズスマシと遊んだり……。いつも、阿弥目は一番びりだ。

婢の伊知井は、同じ四本でも一番速い。どんどん向こうまで進み、あぜに着くと一休みもしないで、阿弥目のうねをUターンしてきてくれる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

阿弥目の手が急に速くなった。がむしゃらに取り進み、父と母とを追いこして行く。
――おや？……――
と、両親は汗のふき出た顔を見合わせる。
――やればできるんだねえ。だいじょうぶさ。阿弥目も、もう大人だ……。――
と、父はほほえんだ目でうなずいてみせる。
だが、母は静かに首を横にふった。
――あなたは、まだ阿弥目をご存じない……。――
と、母の目は笑っている。
母の予想どおりであった。あぜに着くやいなや、阿弥目はバッタのように飛びはね、逃げてしまったのだ。
「あっ！」
と、父が気づいた時、もう阿弥目の足は、二枚も向こうの田のあぜを走っていた。
「阿弥目！　一浴びしたら戻るのじゃぞ！」
背にぶつかる父の言葉をはね返し、阿弥目は里境（さとざかい）の川に向かって一目散だ。
いつもそうであるように、きょうの阿弥目も、一たん川へ飛びこんだが最後、二度とあの地獄のような田へ戻る気にはなれない。

父がいっしょの時でさえ、なんのかのと理屈を並べたてて、父だけを田に帰す阿弥目である。まして、きょうはひとりなのだ。こんな自由はめったにない。

阿弥目は、里の子らと離れ、ゆうゆうと川の流れに身をまかせる。がぶりと顔をつっこんで川水を飲む。

「うまい！　水はよいのう……。だが、田の水は別じゃ。あれは好かぬ！　ふふっ……」

きらきらと光を砕き砕き流れる水が、すっぱだかの膚をくすぐる。

ウグイやフナが、泳ぎくらべを申し込んでくる。が、阿弥目はとり合わない。彼らは、負けそうになると、さっと水底の空に逃げこみ、

「ここまでお出で……」

などと人をからかう、卑怯者だから。

2

遊びつかれて帰った阿弥目の腹に、家の中からただよってくる雑炊のにおいがしみとおっていく。急に目もくらむほど腹のすいていることに気づく。が、さすがに平気な顔で家に入ることはできない。

阿弥目は、じっと家の外壁にはりついて、母か伊知井が呼び入れてくれるのを、待っている

よりほかに方法がない。
——あまりに度重なったゆえ、きょうはもう、呼び入れてもらえぬのではあるまいか？……
とりわけ、きょうの父者は不きげんなことでもあるし……——
阿弥目は心細くなり、思わずくしゅんと水っぱなをすすりあげた。
と、その時、狭い入口から、父の波多目がぬっと出てきた。
「あっ？」
立ちすくむ阿弥目。そのえり首を大きな手でむんずとつかんだ父は、無言のままずるずると家の中へ引きずりこんだ。
炉のそばに引きすえられて、阿弥目は小さくちぢこまる。
「父者、ゆるしてたも」
と、いいたい。いいたいのだが声がのどにはりついて出てこない。阿弥目は、だまって頭を下げているばかりだ。
「腹がすいたであろ」
「？……」
阿弥目は、自分の耳を疑った。母親似の大きな目を見ひらいて、まじまじと父の顔を見上げた。
「腹がすいたであろ。まず、かゆを食え。それからじゃ、話は……」

「父者！　ゆるしてたも。明日からは……」
阿弥目の目から、急に涙があふれ出る。
「よい、よい……。明日からは、いやでも川遊びなどに、うつつをぬかしてはおられなくなるほどに……」
「？……」
いつもとは勝手がちがう。楽しいはずの炉のまわりが、なぜか不安げで心細い。
「母者は？」
「泊子さまのところへ……」
と、伊知井は言葉少ない。
「ふーん」
伊知井の盛ってくれたかゆが、いつものようにのどを通っていかない。
――口無し殿のところへなど……母者は何用で行かれたのじゃろ？……明日から川遊びができなくなるということと、何かかかわりがあるのじゃろか？……――
炉の中にうず高くもられた生のヨモギ葉がくすぶっている。もうもうと立ちこめるこのいがらっぽい煙をきらって、虫がよりつかないのだ。
気まぐれに向きをかえては流れる煙から、ときどき顔をそむけそむけ、波多目は腕を組んで考えこんでいる。

とっくにかゆを食べ終わった阿弥目は、父の前にかしこまり、しきりに自分にいいきかせている。

——話はこれからじゃ。さぞ、叱られることであろ。明日から川遊びもできぬほど、ひどくぶたれるのかも知れぬぞ……ん？　口無し殿もいっしょに、わしをぶつのかな？——

阿弥目は、力持ちで通っている泊子の、太くたくましい腕を思いうかべ、思わず首をすくめた。

と、父の波多目が思い切ったように腕をほどいた。どきっと、阿弥目は緊張する。

——？……——

父は、右手でせわしなく煙をおしやり、重い口をひらいた。

「そなた、昨夜わしが里長殿の家に呼ばれたのを知っておろうの……」

「は、はい」

「わしは……わしはな、てっきり今年の田租の割り当てじゃと思うて……重い気持ちで出かけたのじゃが……」

「あれ？　そうではなかったのか？」

——わしは、きつい割り当てじゃったゆえ、きょうの父者はきげんが悪いのであろと……、そうとばかり思っておったのに……。——

「ああ！　そうではなかった！」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com